第76回有瀬図書館ギャラリー展

神戸学院大学図書館　展示会通信78号

MERIDIAN

2025年12月11日発行

Lafcadio Hearn

二〇二五年十二月五日(金)～二〇二六年三月二十四日(火)

へるん先生のあたまのなか

-ラフカディオ・ハーンが生きた日本-

＊開催時間や開催期間は変更になることがあります。図書館HPにて、ご確認のうえご来館ください。

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)とは

『怪談』『知られぬ日本の面影』『骨董』などで知られる随筆家、批評家。

Lafcadio Hearn
(1850-1904)
画像：パブリックドメイン

ギリシアに生まれ、両親の離婚を機にアイルランドの大叔母に引き取られる。学生時代に遊具が左目に当たり失明。17歳で大叔母が破産して経済的に困窮し、19歳で移民船に乗り渡米した。非常に貧しいの生活を体験した後、シンシナティでジャーナリストとして文筆が認められようになる。

その後、ニューオーリンズやカリブ海のマルティニーク島へ移り住み、文化の多様性に魅了されつつ、旺盛な取材、執筆活動を続ける。ニューオーリンズ時代に万博で出会った日本文化、ニューヨークで読んだ英訳『古事記』などの影響で来日を決意し、1890年（明治23）4月に来日。

同年8月、松江にある中学校に英語教師として赴任。その後神戸クロニクル社の勤務を経て、1896年（明治29）9月から東京帝国大学(現東京大学)講師として英文学を教えた。1903年（明治36）には帝大を解雇されるが、後任を夏目漱石に譲り、さらに早稲田大学で教鞭を執ることとなる。

この間、1896年に松江の士族の娘・小泉セツと正式に結婚し、日本に帰化。三男一女に恵まれる。著作家としては、翻訳・紀行文・再話文学のジャンルを中心に生涯で約30の著作を遺した。1904年（明治37）9月26日心臓発作で54歳の生涯を閉じる。

参考文献：日本近代文学大事典　小泉八雲記念館 https://www.hearn-museum-matsue.jp/index.html

ラフカディオ・ハーンと神戸

神戸での小泉八雲と家族の写真
（写真提供：小泉八雲記念館）

小泉八雲の活動の地としてまず挙げられるのは島根県松江だが、神戸に居住していたことはあまり知られていない。

松江・熊本で教壇に立った後、1894年（明治27）ハーンが44歳の時に神戸に移り住み、居留外国人向けの英字新聞「神戸クロニクル」の記者として活躍する傍らで作家活動も続ける。

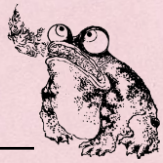
明治二十九年に帝国大学講師として東京に転居するまでの間「心」、「佛の畑の落穂」などを執筆。当時居宅は下山手にあり、2階が洋風で1階が和風の造りになっていた。

居宅跡には現在の兵庫県中央労働センターがあり、敷地内には「小泉八雲旧居跡碑」が建てられている。

神戸在住の間にハーンはセツの戸籍に入夫する形で正式に結婚。日本国籍を取得し、ラフカディオ・ハーンから小泉八雲に改名する。神戸で暮らしたのは1年9カ月と短かったが、人生の大きなターニングポイントでもあった。

参考文献：（公財）兵庫県勤労福祉協会 ひょうご労働図書館 https://hyogo-roudou.jp/about/yakumo/

Lafcadio Hearn History



── 小泉八雲の一生 ──

1850年(嘉永3)	ギリシャにてアイルランド系の軍医の父とギリシア人の母との間に生まれる。
1856年(安政3)	母の離婚のため大叔母のもとに預けられる。
1866年(慶応2)	英国ダラムの学校に在学中、友人との遊戯中に左眼を傷つけ失明。
1874年(明治7)	「シンシナティ・インクワイアラー」紙記者となる。下宿の料理人アリシア・フォリー(マティ)と結婚するが、異人種間婚姻は違法とされていたため、会社を解雇。シンシナティ・コマーシャル社に移る。
1877年(明治10)	マティとの結婚生活は破たん。コマーシャル社を退職し同社通信員となり、ニューオーリンズに到着。
1885年(明治18)	前年12月から開催されていたニューオーリンズ万国博覧会にて日本館の展示品に興味を持ち、日本政府から派遣されていた服部一三と出会う。
1890年(明治23)	「ハーパース・マンスリー」誌特派員として来日。 松江中学に英語教師として赴任。
1891年(明治24)	身の回りの世話をするために小泉セツが雇われる。6月には北堀町の根岸邸（現在の旧居)へセツとともに転居。11月、イギリスの日本研究家・チェンバレンの紹介で熊本の第五高等中学校に転任。
1894年(明治27)	長男・一雄が誕生。
1894年(明治27)	日本に関する最初の著書『知られぬ日本の面影』を出版。 神戸クロニクル社(英字新聞社)に転職。
1896年(明治29)	セツの戸籍に入る形で正式に結婚。日本に帰化し『小泉八雲』に改名。 東京帝大文科大学講師になるため東京へ転居。
1898年(明治31)	ちりめん本『猫を描いた少年』を出版。
1902年(明治35)	怪談・奇談を再話した作品集『骨董』を出版。
1903年(明治36)	東京帝大の講師を辞職する。
1904年(明治37)	早稲田大学講師に就任。怪談・奇談を再話作品集『怪談』を出版。 9月に心臓発作を起こし54歳でこの世を去る。 没後、日本研究の成果となる『日本—ひとつの解明』が出版される。

妻・セツとハーンを取り巻く人々

ハーンと小泉セツ
（画像：パブリックドメイン）

エリザベス・ビスランド
（画像：パブリックドメイン）

1868年（慶応4）、日本が幕藩体制から資本主義社会へ移行していった時代。没落士族の娘として小泉セツは生まれる。そんな中セツは、英語教師として松江に赴任したハーンの身の回りの世話をするため、1891年（明治24）住み込みとして働くようになり、やがて二人は夫婦として暮らすように。幼少の頃から物語好きだったセツは、ハーンの語り部となり、夫の執筆作業の力となっていく。

こうして再話されたラフカディオ・ハーンの怪談・奇談の多くは、セツが語って聞かせたものであった。ふたりのコミュニケーションは「ヘルン言葉」と呼ばれる独特な日本語で意思疎通が行われ、互いの信頼関係は深まっていった。

しかし、夫は心臓発作で突然旅立ち、4人の幼い子供を抱えたセツを、ハーンの友人や親せきが支え続けた。ハーンの親友ミッチェル・マクドナルドや友人のエリザベス・ビスランド、日本研究家のチェンバレンなどが親身になってセツに手を差し伸べた。著作権問題、印税手続き、ハーンに関する著作の出版、「思い出の記」の執筆など、セツは長男・一雄とともに多忙な日々を送ったが、1932年（昭和7）ハーンと暮らした新宿西大久保の家で、孫たちに見守られながら64歳で生涯を閉じた。

展示の様子

編集後記

「雪女」「むじな」「耳なし芳一」…誰しも一度は耳にしたことのある怪談話は、へるん先生こと、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）によって世界に広められました。ギリシャ、アイルランド、アメリカ、西インド諸島を経て、たどり着いた日本で彼が作り上げた数々の著作とともに、へるん先生のあたまの中をのぞいてみませんか？偏見を持たず、公平で愛のあるまなざしで物事を見つめる「オープン・マインド」の精神をもとに、へるん先生が愛した日本がどのように描かれているのか、是非その目で確かめてみて下さい。本学では、へるん先生に関する多数の貴重な資料を所蔵しています。普段は貴重書を含む閉架資料として、閲覧が制限されているものになりますので、この機会に楽しくご覧ください。

参考文献

参考文献：日本近代文学大事典
小泉八雲記念館 https://www.hearn-museum-matsue.jp/index.html
（公財）兵庫県勤労福祉協会 ひょうご労働図書館 https://hyogo-roudou.jp/about/yakumo/

神戸学院大学図書館展示会通信 Meridian第78号
2025年12月11日発行
発行・編集：神戸学院大学 有瀬図書館
〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬518
TEL→078(974)4584　E-mail→pub-lib@j.kobegakuin.ac.jp
ホームページURL→https://opac.kobegakuin.ac.jp/